

## 岷江入楚の「秘」「聞書」「九禪」「或抄」

——真木柱巻を中心にして——

小 高 道 子

岷江入楚は中院通勝が「古来の註釈」を「一覽のためにしるしあつ」めた書として知られる。近年連歌師の注釈についての研究が進み、徳岡涼氏は、通勝が紹巴・兼如を通して三条西公条の説を取り入れたとされた<sup>(1)</sup>。また小川陽子氏は通勝が紹巴の名前を記さずに紹巴の講釈を通じて公条説を取り入れたことを「情報操作」であるとされた<sup>(2)</sup>。しかしながら情報操作により記された公条説についての事例は記されていない。また岷江入楚真木柱巻を検討しても、「秘」からは継承出来なかった公条説を紹巴經由で継承した例は見出せなかった<sup>(3)</sup>。本稿では岷江入楚真木柱巻に引用された注記の「肩付」に着目することにより、岷江入楚の編集過程における「秘」と「聞書」「九禪」「或抄」について検討を加えたい。

真木柱巻の肩付の注記を検討すると、「秘」とする注記を含む項目が二百七十一あるのに対して、「聞書」が六十九項目、「九禪」が九項目、「或抄」が十一項目と、「秘」以外の注の数が少ないことに気付く。

一方、引用されたそれぞれの注釈書を参照すると、もとの注釈書には注が見られるにもかかわらず、岷江入楚が引用していない注が多く見られる。そこで、岷江入楚真木柱の肩付を付した注についてその有無を記し、あわせてもとなった注釈書における注記の有無を検討してみたい。岷江入楚については源氏物語古注集成の番号で項目の箇所を示し、源氏物語古註釈叢刊により十文字以内で項目の見出しを引用した。「秘」「聞書」(「聞」を含む)「九禪」「或抄御説」とする注記のある箇所及び『源氏物語紹巴抄』(以下『紹巴抄』と略す)『孟津抄』『長珊聞書』(陽明文庫蔵、公条説とされる「御説」のみ)に注がある箇所に○印を付した。

※表には注釈書名のはじめの一文字を記し、本文の異同が指摘されている箇所には( )を付して(○)とした。また、その項に注記がない事を強調するために一部×印を付した。

22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
47	46	41	36	35	32	29	27	24	21	18	17	16	15	13	12	11	9	7	5	2	1	眠	
心もてあらぬさまはし	もてかくして	兵衛督は	かけくしきすち	宮つかへなど	うちにもきこしめして	父おと、の御心を	三日のよの	心ざしはありながら	ち、おと、は	ことにつけ給て	かしこにまちとり	いつしかわかとのに	きしきいとなく	いふかひなきことにて	おと、も心ゆかす	心あさき人のためにて	女君のふかうものしと	みるま、にめてたく	ほとふれといさ、かう	しはし人に	うちにきこしめさんこ		
○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	秘
	○		○			○		○		○							○		○		○	○	聞書
○	×	○	○			×	○	○		×	○		○		○	○	×			○	○	○	紹
																							九禪
○	○	○	○	(○)	○		○		○		○		○		○	○	○			○		○	孟
																							或抄
																							長

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23
78	77	76	74	73	72	71	70	70	69	68	67	66	64	63	60	59	58	54	53	51	50	49
なをあらさまに	うちにのたまはする	いとおしうて	又うしろやすさも	世になきしれくしき	まめやかにおほし、る	御手のさきはかり	かのせはよきみち 義	かのせはよきみち 点	心おさなの御きえ所や	みつせ川わたらぬさき	思ひのほかなりや	おりたちてくみはみれ	よそにみはなつも	らうたいのこのそひ	おもひのほかなる身	すくよかならぬよのつ	け、しきさま	大将のおはせぬ	今さらに人の心のくせ	うちつけに	とのもいとおしう	宮の御心さま
○	○	○	○	○	○	(○)	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○
			○		○			○		○		○		○			○					
	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○		○	○
														○					○			
	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○

68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46
121	118	117	116	115	111	110	108	105	103	96	95	93	92	91	88	87	86	85	83	81	80	79
玉をみかける	時〜心あやまり	ほんじゃう	うちはへわつらひ	今はかきりの身	をのかあらんこなたは	人き、やさしかるへし	式部卿宮きこしめして	かのうたかひをきて	やんことなき物とは	さるやんことなきち、	女君人にとり	ひたおもむきにす、み	なよひかに	北のかたのおほしなけ	かくしのひかくろへ	うちに参り給はん事を	かしこにわたり給はん	た、あるへき	あはれにもはつかしく	二条のおと、は	思ひそめきこえし	をのか物とりやうし
○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○		○	○
									○			○			○						○	
○				○	○	○		○	×		○	×			×		○			○	○	○
																○						
○	○					○	○	○			○	○		○	○	○	○			○	○	○
	○															○	○					

91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69
172	171	170	169	168	167	163	160	155	150	142	141	138	136	135	133	132	130	128	126	125	124	123
いつきむすめの	大との、北のかた	いとよの給ふをれい	もてない給ふさまをみ	こ、にはともかくも思は	かく人のおやたち	おほと、北のかた	人の御つらさは	御中よくて	玉のうてなに	宮の御事をかろくはい	みつからをほけたり	もくの君中将のおもと	いとねたけに	しばしかうじ	さはやかにふと	宮のきこしめし	女の御心のみたりかは	おほしうとむな	世の人にも似ぬ	としころちきり	いと身もくるしけに	昨日けふの
○	○	○	○	○	○	○	○	(○)	○		(○)	○	○		×	○	○	○	○	○	○	○
													○		○			○				
○				○			○			○	○	○		○				○				○
																		○				
(○)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○				○				○
															○							

114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92
219	217	215	213	212	211	210	209	205	204	199	198	196	195	194	189	187	186	182	180	178	176	174
よばひの、しり	心たかひとは	きよらをつくし	人のや、みあふる	いかけ給ふほと	おほきなるこの下なり	さうしみは	中将もくなどあはれの	お、しきさまして	ならひなき御ひかり	御めのいたうなきはれ	みつからは	袖のこほりもとけなん	よそにても思ひたに	たちとまり給ひても	おと、たちも	かゝるにはいかてと	今はかきりと、むとも	かうしなともさなから	われもむかへびつくり	この御けしきも	くれぬれは心もそらに	人のおやけなく
○	(○)	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
					○					○												○
○	○			○	○		○	○	○	×	○	○		○		○	○	○	○			○
○			○	(○)	○		○	○	○		○	(○)	(○)	○	○			○	○			○

137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	115
275	274	273	272	271	270	262	257	250	242	241	239	238	237	235	234	231	229	228	226	225	224	220
むかし物かたりなどを	ふかき心はおもひわか	心をくへきわたりそと	かのおと、たちの	宮のおはせんほと	おとこ君たちはえさら	かたへはをのく	人のたえはてんさまを	父宮き、給ひて	一よはかりのへたて	ちうげんに	うきことをおもひさは	なさけなきことよ	かやうの人に	なこりなき御もてなし	ひとりゐてこかる、む	御さうそくの事なども	まことの心はへの	心のうちにも	よかれを何ともおほさ	づしやかに	こゝろさへ空にみたれ	よ一夜うたれひかれ
○	×	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	(○)	○	○	○	○
○	○	○		○	○							○					○		○	○	○	
○	○	○	○	○	○						○	○			○	○					○	○
											○											
○			○	○	○			○		○	○			○	○	○			○	○	○	○
													○									

160	159	158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	138
319	317	315	310	309	306	303	302	300	299	298	297	296	295	294	292	290	289	288	286	283	280	277
このさうのめいほく	をのれひとりをはさる	かしこき人は思ひをき	をのれふるし給へるい	すゝろなるまゝ、二かし	人ひとりをおもひ	御中のうらみとけさりし	女御をもことにふれ	おほきおとゝを	は、北のかた	いみしうおほしたり	宮にはまちとり	君かすむゆへにはあ	かくるゝまでそかへり	ともかくも岩間の水の	あさけれと石間の水は	なれきとは思ひいつと	今はとて	姫君ひはた色のかみ	かく暮なんにまさう	いまなんともきこえで	いたうあれ侍りなん	ましてかたのやうにて
○	○	(○)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○
			○									○		○	○						○	
○		○	○		○	○	○		○			○	○	○	○	○		○		○		○
															○	○			○			
	○	○	○		○		○	○	○				○	○	○	○		○		○	○	○
								○								○						○
																○						○

183	182	181	180	179	178	177	176	175	174	173	172	171	170	169	168	167	166	165	164	163	162	161
374	370	356	353	352	351	350	349	348	346	344	343	342	341	338	336	335	334	333	327	326	321	320
はしたなかりしにことつ	女御の御さまの	つみさり所なうよの人	おもほしすつましき人も	いとわかしくしき心ちも	いさめ申給ふことはり	いとゝひかしくしき	何かたゝ時にうつる心	たいめんし給へくもあ	かのまきはしらをみ給	よしかのさうしみは	いとおもひのまゝなら	さてもよの人にゝす	姫君は君の御ありさま	まつとのに	かんの君はかゝる事と	なとかはにけなからん	よきうへの御そやなき	うちほのめきて	かんの君にかくあやし	宮のかくかるしくしう	まがくしき事などを	いよくはらたちて
○	○	○	○	○	○	×	○	○	×	×	○	○	○	○	×	○	○	×	○	○	×	○
				○		○	○		○	○					○			○			○	
○		○	○	○	○	○	○	○								○	○	○			×	
○	○	○	○	○				○		○	○	○	○	○		○	○	○	○			
																		○				
																		○				

206	205	204	203	202	201	200	199	198	197	196	195	194	193	192	191	190	189	188	187	186	185	184
420	418	415	414	412	411	407	404	403	401	400	399	398	397	396	395	394	393	392	391	385	383	376
とのゐ所にゐ給て	けはひにきは、しく人々	さうしみも女房たちも	この御つほね	よそ人とみ給はねは	大将殿の太郎君と	六条院には此たひは所	宮はまたわかく	春宮の女御もいとほな	中納言宰相のむすめふ	左の大殿の女御など	中宮弘徽殿	みたりかはしき更衣た	御心のうちは	にしに宮の女御	承香殿のひんかしおも	せうとのきんたち	宰相中将ねんころに	かたへのおとゝたちこ	おとこたうかありければ	このまいり給はんと	をのつから人のなから	春のうへも
○	○	○	○	(○)	○	○	○	○	○	(○)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
										○												
						○		○	○		○	○		○					○	○		
○			○		○	○		○	○		○		○	(○)	○	○	○	○	○	○		○
																					○	
○															○					○		

229	228	227	226	225	224	223	222	221	220	219	218	217	216	215	214	213	212	211	210	209	208	207
465	460	459	457	456	455	454	452	450	449	448	445	443	441	440	438	437	435	433	427	424	423	421
やうくこそはめなれ	うれふへき人あらはこ	そのいまより	いまよりなん思給へし	いかならん色ともしら	宮つかへのらうもなく	たかひ給へる所やはあ	こくなりはずまじきに	き、いれ給はぬさまに	よろこひなともおもひ	あやしふおほつかなき	いとつかしけに思ひ	かの御心はへは	御かたちはいふよしな	うへわたらせ給ふ	さへつる声もみ、と、め	み山木にはねうちかは	それよりとて	ねんしあまりて	さはかりきこえし物を	おと、の心あはた、しき	さふらふ人くそ	おほしうつるらん御み
○	○	○	○	○	○	○	○	(○)	○	○	○	○	○	○	(○)	○	○	○	○	×	○	○
																○						
	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○	○	
	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○	○	○			○		

252	251	250	249	248	247	246	245	244	243	242	241	240	239	238	237	236	235	234	233	232	231	230
516	511	509	507	505	503	502	500	491	489	488	487	485	484	482	481	480	475	473	472	471	469	468
かきたれてのとけき比	大将のおかしやかにわ	さてもつれなきわさなり	た、おもふ事かなひぬ	かの宮にも	ぬすみもていきたらま	女もしほやくけふり	もとよりしたいならぬ	かはかりは風にもつて	いかてかきこゆへき	おしむへかめる人も	野をなつかしみいあか	九重にかすみへたては	かういとぎびしきちか	こなたかなたの	さてくるまよせて	われはわれとおもふも	むかしのなにかしかた	人よりさきにすゝみに	さらは物こり	ち、おと、など	みつからもにけなき	いそぎまとはし給
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
					○																	
○	○	○		○	○	○	○	○			○	○	○		○		○					○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	(○)	○	○	○			○	○	○	○		○	

275	274	273	272	271	270	269	268	267	266	265	264	263	262	261	260	259	258	257	256	255	254	253
573	572	570	563	561	559	558	556	554	553	552	550	546	543	540	538	535	533	531	530	528	525	518
よろしからぬ御けしき	すかくれてかすにもあ	まろきこえんとて	おなしすにかへりしか	おほつかなき月日	かりの子のいとおほか	けにあやしき御心のす	かほにみえつゝ	色にころもをなと	呉竹のませにわざとな	春の御まへをうちすて	猶かのありかたかりし	あかもたれひきいにし	あつまのしらへをすが	さましわひ	いまは何につけてかは	さしあたりたる事なれ	かのむかしのかんの君	ひきひろけて玉水のこ	いや／＼しくかきなし	なかめする軒の雫に袖	この人にもしらせ給は	いかてかきこゆへから
○	○	○	○	○	○	○	○	(○)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○			○		○	○		○					○			○		○		○	○	
○	○		○		○	×	○	○			○	○	○			○		○	○	○	○	
			○		○			○			○	○	○		○	○	○	○	○			
							○						○									

計	296	295	294	293	292	291	290	289	288	287	286	285	284	283	282	281	280	279	278	277	276
	615	614	613	612	611	609	608	604	603	600	599	598	597	595	592	588	587	580	579	577	574
	はしたなかめりとや	よるへなみ風のさはか	この御かたにはかうよ	たな、し小舟こきかへり	おきつ舟よるへなみち	此よにめなれぬまめ人	あふなき事や	宰相中将も	秋の夕のた、ならぬに	ないしのかみのそみし	さても有ぬへき	まいり給ふことそ	おほやけことは	宮つかへにかひありて	わざとかしつき給ふ君	そのとしの霜月に	あやしうおとこ女につけ	わかき御心のうちに	姫君をそたへかたく	いよ／＼ほけしれて	この大将のかゝるはか
	×	○	○	×	×	(○)	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
69	○			○	○		○		○								○				
168		○	○	○	○	○	○	○			○		○		○	○		○	○	○	
9																					
201	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○		○			○	○	○	○	○	○
11	○																				
9	○																				

この表から、岷江入楚は「秘」を中心にして公条説を継承していると推定できよう。「聞書」とする岷江入楚の注記と『紹巴抄』、「九禪」とする岷江入楚の注記と『孟津抄』とを比較すると、参照したと推定される注釈書に注記があっても、岷江入楚では注記があることさえ記さないことが多い。岷江入楚が「古来の註釈」を「一覽のためにしるしあつ」めたというのは、必ずしもそれ以前の注釈書の一覽表を作ることはなかったと推測される。単に古注集成を作るのではなく、古注を選択して編集した所に通勝の源氏物語研究の特色を見ることが出来るよう。諸注の取舍選択については改めて検討を加えたい。

注

- (1) 徳岡涼氏「岷江入楚」所引「聞」「聞書」について(上智大学国文学論集33、平12)。
- (2) 小川陽子氏「岷江入楚」——諸説集成の思想——(前田雅之編『中世文学会の学芸と古典注釈』竹林舎 平23)
- (3) 「岷江入楚の「聞」「聞書」」(中京大学国際教養学部論叢 平26・11)、「岷江入楚の「秘」と「聞」「聞書」」(同 平27・3)
- (4) 引用はそれぞれ平安文学資料稿、源氏物語古注集成、国文学研究資料館マイクロフィルムによる。